

〔書評と紹介〕

大山誠一著

『長屋王家木簡と金石文』

鐘江 宏之

本書の著者、大山誠一氏には、本書のほかにすでに一九九三年に吉川弘文館から刊行された『長屋王家木簡と奈良朝政治史』という著書があり、長屋王家木簡の内容分析を通して奈良時代前期の政治社会を見通そうと試みている。その考察の過程は本書に収載された論考の発表と相前後しており、内容的にも密接につながりを持っている。また、本書の後半における論考は、かつて本誌『弘前大学国史研究』に発表され、学界にその斬新な発想の如何を問うたものである。

本書第一部には、『長屋王家木簡と奈良朝政治史』を執筆する際の前提となった論考が収められている。一九八八年に平城京左京三条二坊の邸宅跡で見つかった膨大な木簡群は「長屋王家木簡」として奈良国立文化財研究所から調査概報が発表されたが、第一節「所謂「長屋王家木簡」の再検討」は、この木簡群を独自の視点で分析することによって、邸宅の所有者とそれに関わる家政機関に言及したものである。木簡群の積文が公表された直後に精力的にその内容の分析に取り組んだ点で、以後の論争の端緒を開くこととなった。著者にとっても、本書に収められた奈良朝政治史に関わるすべての論考の出発点となっている。ただし、いささか結論が先に立ったように見られる点が多く、考証と結論との関

係が明瞭にはとらえにくい。木簡の解釈についても、今一歩踏み込んだ考え方が必要であろう。一例を挙げると、羽咋直嶋が春米を運んだと解読できる付札について、同文のものが三通あることから、それぞれ別々に機能するはずのものが一セットで納入する側から出土したとみて、出土地が付札に記された苑所の「長屋皇宮」にはあたらなとの見解を述べるが、しかし、同文の木簡三点を即座に一件の納入行為に結びつける必要はない。調の荷札に想定されるような一セットの木簡の機能分担は、納入者個人の名前を記すという調の収取方法との関わりでそのように想定できるのであり、この木簡に応用できるものではないだろう。木簡個々に対する考察という点で、この論考はまだ決して練られたものとは言えない部分もある。もちろん、発表直後に早速分析に取り組み、学界に先駆けて試案を提示したという意味はあるが、結論に至るまでの過程でもう少し禁欲的であるべきとの感を覚える。第二章「藤原房前没後の北家と長屋王家木簡」は、東野治之・森田悌両氏による奈良時代の家政機関のあり方についての論争に刺激を受け、著者が「長屋王家木簡」に関わる長屋王家・吉備内親王家・氷高内親王家の理解について再考したものである。この論考では貴族の家政機関が国家に依存しているという理解が基礎になっている。たしかに今日までの研究史の上で、律令法を中心とした研究からはそのように理解されてきた。しかし、当時の実態はすべてが法に規制されるものではなかったはずである。実態を示す史料が増加した以上、律令法の適用を絶対視して考えるのではなく、実態から適用のされ方を考えていくのが分析の方向として求められるのではないだろうか。木簡の考察の上では、法と切り離れた実態を追究するとい

う姿勢が必要であり、さまざまな可能性を広く許容しつつ検討していかねばならない。大山氏が指摘する東野・森田両氏の論の欠点も的確な部分があるが、しかし、家政機関に対する理解は現在の段階でも定まったものとなつてはおらず、今後も研究が進展することを望みたい。

第二部では、『長屋王家木簡と奈良朝政治史』の執筆後に現存の金石文に対する考察を進めた著者が、対象としたそれぞれの金石文の分析によって、長屋王を中心とした人々の世界が各金石文作成の背景となっていることを述べる。第一章「長谷寺銅板法華説相図銘の年代と思想」は、この銅板銘文の作成年代を用語の点から養老六年（七二二）とし、銘文に現れた思想が唐の道宣の影響を受けたものであることを指摘して、道宣の思想を唐からもたらした道慈による述作と主張する。藤原不比等政權から長屋王政權への展開とこの銘文の内容との関係についての理解には、興味深い着眼点が随所に見られる。第二章「長谷寺銅板法華説相図銘の年代をめぐる諸問題」は、前章の論考に対して片岡直樹氏が批判した点について反論したものである。「飛鳥清御原大宮治天下天皇」が天武天皇を指すといった基本的な点は、大山氏の主張する通りであろう。しかし、思想的背景についての点を多く主張するあまり、不確定な要素にまで言及しすぎたのではないだろうか。反論としては、もっと端的に要所を押さえた冷静なものを望みたい。第三章「野中寺弥勒像」の年代について」は、長谷寺銅板銘文との共通性を指摘し、作成年代を神亀三年（七二六）とする。日本における弥勒信仰の成立を養老年間に求め、それが長屋王とその関係者に限られたものとみる点は、新羅や百濟からそれ以前に伝播したことを否定する論拠も十分とは思えず、また、史料

的制約を念頭に置いた上で長屋王の関係者に弥勒信仰が限られると断言できるだろうか。この点の理解が前提となつて、長屋王を中心とした思想世界の考察が行われているだけに、やや性急に思われる。また、銘文中で新たに釈読しなおした「檀寺」（この釈読もまだ検討の余地がある。）について、元正天皇の個人的な寺とする解釈を示すが、これも想像の域を出ない。銘文中の記日が元嘉暦を用いている点からすれば、天智五年（六六六）に当てる方が依然として有力視できるし、またこの像が野中寺に伝来したことについても十分には説明できていない。

第三部は第二部までの考察から発展し、八世紀前期の政治史の過程で、七世紀の歴史像の中での聖徳太子像が捏造されたとする大胆な仮説を提示している。第一章「聖徳太子」研究の再検討」は、「聖徳太子」に関わる諸史料について分析し、『日本書紀』編纂時の要請から「聖徳太子」という人物像が練り上げられ、創造されたことを述べる。これまでの聖徳太子についての研究は、著者が「歴史学が信仰の呪縛からいまだ解放されてはいない」と述べるように、たしかに『日本書紀』の記述を批判的に客観化できているとは厳密には言えないだろう。その人物像の形成過程がわからぬからこそ、『日本書紀』の記述をいたずらに曲解することなく考えてきたのであり、著者のこの論考はこうしたいわば七世紀史の聖域に挑んだことになる。『日本書紀』に登場する「聖徳太子」の活躍は、冷静に考えれば超人的であり、誇張や後世の述作の関与は十分に想像できる。著者は、長屋王家木簡や前章までに扱った金石文についての知見から、八世紀前期の政治社会における動向が、『日本書紀』編纂において七世紀の歴史過程における聖徳太子像を創り出すことにな

ったとするが、ここでも重視されるのは道慈の介在である。さらに、藤原不比等から長屋王へと政権が移る中での『日本書紀』の編纂において、また、成立した『日本書紀』を前提として長屋王から藤原武智万呂へ政権が移った際にも聖徳太子が重視され、光明子を盛り立てるために法隆寺系の聖徳太子関係史料が作成されたとする。法隆寺系の史料が、一種の政治ショーのために作成されたとする見方である。祥瑞の登場などにおいても、八世紀においては都合よく作り出している可能性があり、こうした政治の場面における史料捏造の可能性も十分にあり得るだろう。しかし、あくまで一つの可能性として認められる部分があるということであって、法隆寺系史料へのこのような見方に絶対的な説得力があるというわけではない。ひとつの説明としては成り立つのだが、「養老四年に完成する『日本書紀』以前には、法隆寺系の史料も聖徳太子もまだ存在しなかった」ことを証明できたとと言えるかどうかは疑問である。本章では「聖徳太子信仰」という語で聖徳太子の人物像を創造したことを指しているようであるが、八世紀前期の歴史における事象を語るのであれば、「信仰」という用語はやや問題にはなろう。後世におけるいわゆる「太子信仰」と区別して扱うためにも、別な用語を使った方がよかったのではないかと感じた。第二章「聖徳太子」をめぐる若干の問題」は新稿で、前章で取り上げた史料のいくつかについて、個別に問題を掘り下げている。聖徳太子像と玄奘三蔵像とが非常に類似点の多いこと、救世観音が「上宮王等身」とされることと唐における玄宗の等身像との関係など、重要な指摘がなされ、著者の着眼点の鋭さを窺うことができる。さて、本書全体を通して疑問に思われたのは、なぜここに取り上げら

れたあらゆる著作を道慈のものとして考えなければならぬのか、その考え方には飛躍があるのではないだろうかという点である。当時のこうした思想は、たしかに道慈の影響はあろうが、一人のキャラクターに帰結できるものではなく、当時流行した思想の一つとして理解すべきものであろう。たしかに長屋王願経の神亀経跋文には道慈が名を連ねており、また『懷風藻』の記述からも道慈と長屋王に交流があったことは間違いない。しかし、道慈と同様の思想があることと、道慈が直接に関与したことは、やはり慎重を期して区別すべきであり、道慈を置いて他にこうした著作をなしている人物が存在しないとまでは言い切れないのではないだろうか。また、長屋王が藤原武智万呂によって滅ぼされたとして、その長屋王に思想的影響を及ぼしている道慈が、なぜその後に弾圧を被らずに武智万呂に重用されていくのかという点も疑問である。著者なりの説明はなされているが、長屋王の思想に深く関わったのであれば、その思想を危険視して武智万呂が動いたとみている著者にとって、道慈の立場はどのようなものなのだろうか。こうした疑問を持つてみると、すべての思想的背景を道慈一人に帰することにはやや無理があるように思われる。

また、唐からの道宣の思想の流入にしても、新羅との交流からのルートを全く否定できるものではないだろう。新羅經由の唐文化の流入が限られたものであることは事実だが、その内実は明らかになっていない。著者は七世紀末の唐や新羅と日本との交流の有無を外交交渉の状況から考察しているが、思想の影響という問題について外交交渉とは別なルートを想定できないのだろうか。積極的に別な見方を提示できるというわ

けではないが、結論を限定するためには、思想の流入の問題は外交交渉の点からの考察だけでは不十分な面もあろう。本書で取り上げられた銘文の思想的背景については、結論にもっと幅をもたせて考えるほうがよいと感じられる。

さらに、こうした考察の中で、当時の立場からみて銘文を作らせたのが長屋王や元正天皇に「ふさわしい」といった論調が多用されることも気にかかる。結局、こうした著名な人物の政治的立場と当時見られた思想とのつながりを、政治史的展開の解釈によってつなげているのであって、こうした論調を多用することは仮説の域を出ていないとの印象を招く恐れがあるだろう。

古代史を研究している者の立場から見ても、七世紀史の研究と八世紀史の研究の間には断絶（もっと穏やかに言えば「性格の違い」とすべきかもしれない）がある。それは、対象とする史料の性格の違いに起因する。七世紀の史料についての史料批判は、根本のところにおいて難しい。七世紀の内容について書かれた史料は、ほぼ八世紀にまとめられたものであり、どこまでを史実とし、どこからを潤色と判断するのは、これと並べることでできる七世紀に作られた史料が絶対的に不足しているために困難を極める。そのことを前提として、もう一度七世紀の史料を考え直そうという姿勢が出ている点では、著者の試みは、従来の研究が躊躇していた「聖域」に踏み込んだ、注目すべきねらいを持っていると言える。法隆寺系の銘文史料が法隆寺資材帳に見えないことを突破口とした論の展開は、すでに試みられていた視点ではあるが、さらに多くの付随する問題を挙げていることは、有力な問題提起として認められよう。

以上、「書評と紹介」の場をかりて、本書に触れて感じたままのことを述べさせていだいた。本書は画期的なねらいを持ち、ひとつの大きな仮説を提示している。しかし、それが論証として成功したかどうか、本書で述べられたことは、あるいは史実がそうであったという可能性なしとは言えない。しかし、我々が確実に史実と認め得る事象を根拠にして歴史像を手堅く構築していく限り、現在の研究水準では、まだ本書で大きく展開された内容までには至らないというのが、実感である。ただし、重要な仮説として常に検証されるべき問題を提起している点において、本書に現段階での大きな価値を認めることができよう。

（吉川弘文館 A5判 三五五頁 本体七五〇〇円 一九九八年三月刊）

（かねがえ・ひろゆき 弘前大学人文学部助教授）